

4 地鶏飼養農場で発生した伝染性ファブリキウス嚢病と 鶏コクシジウム病の混合感染を伴ったヒストモナス病

秋田県北部家畜保健衛生所

○野村真実、鎌田久祥

発生農場は福祉事業所の運営で、年間5ロット5,000羽飼養。職員2名と施設利用者15名が飼養管理。2013年8月、初めてヒストモナス病が鶏コクシジウム病との混合感染で発生、2ロットで約120羽が死亡。2014年度より放飼開始後2日目と9日目にヒストモナス原虫を媒介する鶏盲腸虫の駆虫を目的に塩酸レバミゾールの予防的投薬を開始、2014年度の発生は1ロット15羽のみ。2015年5月、1回目導入鶏で放飼開始後2、9日目の投薬後、黄色水様便がみられたことから、16日目に3回目の投薬。約1月後、2回目導入鶏が放飼開始後9日目の投薬の4日後より黄色水様便を排泄、衰弱により多数死亡したことから病性鑑定実施。

検査材料は69日齢の生体3例と70日齢の生体5例。

剖検で全羽に共通して、肝臓の広い範囲に類円形・菊花状の病変を確認。盲腸は腫大・硬結、偽膜様物を含む内容が充満。ファブリキウス嚢(F嚢)は小豆~大豆大。細菌検査では有意菌分離陰性。寄生虫検査では主に盲腸内容でコクシジウムオーシストを確認。病理組織学的検査で盲腸粘膜は広範囲で壊死・脱落、粘膜固有層~下組織あるいは筋層にヒストモナス原虫の濃厚寄生がみられ、同部は顕著に肥厚。なお、5羽中3羽でヒストモナス原虫のみならず、鶏コクシジウムの濃厚寄生を認めた。肝臓では巣状壊死病変が密発、ヒストモナス原虫がみられた。F嚢は5羽中3羽で濾胞の萎縮等がみられ、伝染性ファブリキウス嚢病(IBD)ウイルス抗血清を用いた免疫組織学的染色で、全例のF嚢に陽性抗原を確認。ウイルスは遺伝子学的検査で野外株の従来型に分類。検査成績からIBD、鶏コクシジウム病の混合感染を伴ったヒストモナス病と診断。剖検後、直ちに塩酸レバミゾール、サルファ剤の投薬を指導、投薬5日後から死亡なし。

今年度、2ロット続けてヒストモナス病と、その疑い例が発生、約90羽が死亡したことから、3回目導入鶏では塩酸レバミゾール投薬を放飼開始後2、7、12日目に変更。IBDについてはこれまでワクチン未接種。ワクチンプログラムにIBDワクチンを追加、育雛舎の消毒を実施。鶏コクシジウム病対策としてサルファ剤の予防的投薬を開始。3年連続して発生したヒストモナス病により、寄生虫による重度の土壌汚染が示唆されたことから、来年度以降は飼養形態の変更を行い、予防的投薬に頼らない方式での飼養管理を行う予定。